岡山大学教育学部共催
日本音楽表現学会第４回（グリーン･アベニュー）大会報告

期日：2006年６月17日（土）～18日（日）
会場：岡山大学創立50周年記念館

1. 日本音楽表現学会の概要：

日本音楽表現学会は，音楽の演奏，創作，教育等に関する研究協議を行い，音楽文化の学術振興に資することを目的として2003年に設立された。以来，年１回の大会，機関誌『音楽表現学』，年３回の「ニューズレター」の発刊を中心に，各種演奏会や講演会，イベントの後援，その他さまざまな活動を行っている。現在180余名の会員は音楽家と研究者であり，その分野は声楽，ピアノ，管弦打楽器，作曲・指揮，邦楽，音楽教育，音楽学など多岐にわたっている。日本学術会議協力学術研究団体。

2. 岡山大学教育学部と日本音楽表現学会との関係：

岡山大学教育学部には，本学会の設立準備の段階から事務局が置かれ，学会活動は本学部を基盤として行われてきた。設立準備会事務局長，学会事務局長は奥　忍岡山大学教授であり，理事には2005年９月まで本学部非常勤講師であった柳井修香川大学教授を擁している。また，長岡功助教授も選挙管理委員長を務めるなど，学会の歴史にとって本学部は切り離すことができない。

3. 後援等：

グリーン･アベニュー大会では、学会開催が県下の音楽関係者に貢献できることを目的に、岡山県教育委員会をはじめ近隣諸市の教育委員会，および岡山県幼稚園音楽教育研究会，小学校音楽教育研究会，中学校音楽教育研究会，高等学校音楽教育研究会等から後援を受けた。また、大会の趣旨に賛同して、福武教育振興財団からは助成を、林原共済会からはさまざまな点から協力を得ている。

4. 音楽活動・音楽教育と地域貢献

平成10年度の学習指導要領改訂と教員免許法改定によって日本音楽が学校に積極的に導入されるようになって以来、地域の学校と音楽家の連携は必要不可欠のものとなっている。背景に、音楽教員が従来西洋音楽畑で育ってきており、日本音楽に関する知識と技能、感受性は非常に限られていることが挙げられる。このような状態の中で文化庁は「学校への芸術家等派遣事業」を立ち上げ、また、各地で音楽関係NPOの活動が見られる。しかし、多くの場合、音楽家と地域（学校）との協同にさまざまな問題がみられ、必ずしも有効に機能しているとは言い難い。

学会ではこのことをきわめて今日的なこの問題ととらえ、地域に居住する音楽家の地域連携に対する意識向上と、学校側のニーズ、実情を把握するために、今回の企画を実現した。

このような問題意識はまた、教育学部の問題意識とも共通してするものである。学会を共催することによって、地域の学校教育の質の向上、外部の音楽家の協力を得るTT等の授業改善に寄与することができると考えられる。

5. プログラム

第４回大会は、６月の岡山大学イチョウ並木の美しさにちなんで「グリーン・アベニュー大会」と名付けられた。くらしき作陽大学の邦楽関係者による三曲合奏「竹生島」でオープニング、続いて、本学会の会員

でもあり、子どもたちに対する音楽文化の普及活動に熱意のある世界的なヴァイオリニスト、五嶋みどり氏による「これからの演奏家の理想の姿」と題する基調講演を行われた。ここでは理想の音楽家とは「演奏能力とアウトリーチのノウハウを備えた音楽家である」という自身の音楽活動に基づいた強い主張がなされ、日米両国を比較しながら、地域連携できる音楽家のあり方、その育成方法、地域のニーズと連携の機会が示された。

続くシンポジウム「音楽家の活動ーコミュニティー・エンゲージメント」では，神戸女学院大学アウトリーチセンター長の津上智美教授と元天理小学校教諭の松本勤氏を迎え、大学内から地域へとひろがる音楽家の育成、その方法、さらに小学校では音楽教室から校内へと広がる音楽授業、音楽家となった卒業生と子どもたちとの交流が紹介された。

「専門性の高い地域内インターンシップ」をねらう神戸女学院大学のアウトリーチセンターの方針、「音楽の専門的な知識と技能を持って一般社会に出て行くこと」は、地域への還元の視点から参会者に深い共感を持って受け入れられた。同時に、高い音楽的技能を持ち得ない音楽専攻生を擁する教育学部の教員からは、音楽大学とは別の地域連携があって良いのではないか、という意見が出された。一方、音楽大学側の問題として学生の「教育の視点の希薄さ」が指摘され、両種の大学の連携が提案されるなど、音楽関係コンソシアムとでも呼べる組織誕生の萌芽も感じられたシンポジウムであった。

１日目の夕方には、バッハの無伴奏チェロソナタをチェンバロ曲として再構築する研究、尺八を実際に吹いたり、義太夫を語ったりするワークショップが開かれ、深い専門的な研究に裏付けられた演奏や、ふだん接することのなかったジャンルの実技体験に参加者一堂大いに沸いたことであった。２日目はパネル・ディスカッションと研究発表、楽譜製作ソフトのデモンストレーションが行われ、音楽文化の活性化と音楽教育のさらなる充実・発展をめぐってさまざまな議論が行われた。

6. おわりに

本大会が岡山大学50周年記念館で開催されるのを機に、この地域居住者で学会に入会された方も多く、今後の岡山での音楽文化の発展が期待される。次回の熊本大会が、岡山地域の新入会員にとって自身の研究を切磋琢磨する機会となれば、グリーン･アベニュー大会の意義がさらに深まることを願っている。

【補足】「アウトリーチ」と「コミュニティ・エンゲージメント」について

音楽家が地域社会に対して働きかけることに関して、現在の日本では「アウトリーチ」という言葉が用いられている。「アウトリーチ」は芸術分野では、日頃芸術や文化に触れる機会の少ない子どもたちや市民に対して，芸術家や芸術施設が働きかけを行うことを意味している。しかし，本来「手を伸ばすこと」「手を伸ばした距離・到達距離」を表す「アウトリーチ」は意味のとらえにくいカタカナ用語の一つといえる。

アウトリーチ」は「奉仕」「福祉活動」というニュアンスを含めて語られることが多い。もしも芸術家が地域における活動をこのような意識で行うならば、地域の人々が「恵まれない」人々の脈絡でとらえられる可能性がある。また、音楽の質が無料の、安価なレベルにとどまったり、活動の範囲がちょっとした好意の範囲内、本業に影響しないマージナルなレベルにとどまる可能性もある。したがって、地域連携の活動として発展の可能性が限られてくるように思われる。

同種の活動に対してアメリカでは現在communityengagementが用いられている。日本語に訳すと「地域社会，一般社会に対する取り組み」である。「アウトリーチ」がその場を共有する人々間に上下関係を感じさせるのに対して「コミュニティー・エンゲージメント」という言葉にはそれが感じられない。「コミュニティー・エンゲージメント」の概念を「地域社会において、その場を同じくする人々の間で音楽を共有する活動」と定義し、このシンポジウムではこの用語を用いることにした。